

熊取町埋蔵文化財調査報告第56集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・XXVIII

平成27年3月

熊取町教育委員会

は し が き

古代から熊取野とよばれた本町域は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持し、恵まれた自然と貴重な文化遺産を今日に伝える町であります。

町内には重要文化財中家住宅をはじめ有数の文化財が知られていますが、他に埋蔵文化財包蔵地として43ヵ所を数える遺跡があるなど、町内全域に遺構や遺物が埋蔵されています。

熊取町では昭和60年度から国庫補助金等を受けて発掘調査を実施し、これまでに貴重な資料を得ることができました。

本書は平成26年度国庫補助事業として実施した発掘調査の実績報告書として作成したものです。今後多方面においてご活用いただけるよう願っております。

最後になりましたが、本年度現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

熊取町教育委員会
教育長 西牧 研壯

例　　言

1. 本書は、平成26年度に国庫補助金を受けて、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化振興グループが実施した熊取町遺跡群発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化振興グループ考古学技師前川 淳を担当者として、平成26年4月1日に着手し、平成27年3月31日に終了した。
調査では、掘削精査した調査区を写真撮影し、調査区位置図（平面図）、調査区壁面図を作成し記録した。
3. 本書は、平成26年4月1日から平成26年12月29日までの間に実施した発掘調査と、前年度第4四半期の平成26年1月4日から同3月31日の間に実施した発掘調査を掲載する。
4. 本書における図面の標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
5. 本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
6. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査補助員の参加を得た。
森田享子、野田由美
7. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化振興グループ考古学技師前川淳が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 地理的環境と周知の遺跡	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 周知の遺跡	3
第3章 調査成果の概要	
第1節 朝代北遺跡13-1区の調査	5
第2節 東円寺跡14-1区の調査	6
第3節 東円寺跡14-2区の調査	8
第4節 久保A遺跡14-1区の調査	9
第5節 野田遺跡14-3区の調査	11
第4章 まとめ	13

第1章 はじめに

平成26年度における、文化財保護法に基づく土木工事等による埋蔵文化財の発掘の届出・通知件数は28件（平成26年12月29日現在）である。

本書では、平成26年度12月28日までに国庫補助事業として実施した東円寺跡をはじめとする町内遺跡の調査4件と、前年度第4四半期に実施した朝代北遺跡の調査1件の成果について報告する。

遺跡名	所在地	届出面積	調査年月日
朝代北遺跡13-1区	熊取町朝代東2丁目5-23	128.38m ²	平成26年3月10日
東円寺跡14-1区	熊取町野田2丁目2209-5	131.27m ²	平成26年6月4日
東円寺跡14-2区	熊取町野田2丁目2336-1、2336-2の各一部	201.55m ²	平成26年8月29日
久保A遺跡14-1区	熊取町小谷南1丁目1824-3	271.93m ²	平成26年10月15日
野田遺跡14-3区	熊取町紺屋2丁目1143番5、1139番7	121.18m ²	平成26年10月30日

第2章 地理的環境と周知の遺跡

第1節 地理的環境



熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.23km²を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることができます。

第2節 歴史的環境

遺跡数は平成26年12月現在で43ヵ所である。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、野田遺跡の所在する野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器やそれに後続する時期の石鏃が検出されている。

明確に弥生時代とする遺跡は発見されていない。JR熊取駅のある大久保では、駅前整備事業に伴って昭和61年から平成2年の間に発掘調査を実施し、畿内第V様式を示す土器等

を検出して大久保遺跡群として周知されたが、その土器群は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡として、町中央部の山の手台住宅に五門古墳と五門北古墳が記されているが、既に開発で消滅してしまって詳細は伝わらない。宅地となってからの付近の調査では埋蔵文化財は一切確認できていない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥第V様式といわれる土師器や須恵器を検出している。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡(現:野田遺跡)87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成10年度に久保で飛鳥時代から奈良時代の土器群を伴う遺構群を検出し、平成11年7月熊取町七山(七山東遺跡)で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が相次いで検出された。また小垣内においては、平成13年度の試掘調査で中世の土器とともに奈良期の須恵器破片が出土している。これらのことから熊取町全域は奈良時代には本格的に開発されたものと考えられる。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。主だったところでは野田の野田遺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡、大久保の大久保E遺跡、小谷の久保A遺跡などで瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。平成13年度に幅10m程の溝跡他を発見した小垣内西遺跡は地名に因る集落跡の可能性もある。平成15年度にはその北東200m付近で中世の井戸跡等を有する集落跡の小垣内中遺跡を発見している。中世末期の様相については、和田にある重要文化財来迎寺の新本堂建設工事の際、境内から多数の16世紀の土師器皿や瓦片が出土している。

江戸時代の遺跡としては、五門の重要文化財中家住宅およびその周辺遺跡、大久保の重要な文化財降井家書院を中心とする降井家屋敷跡がある。平成13年度の中家住宅東側隣接地(中家住宅周辺遺跡)での調査では、3m²程度の1箇所のトレンチ内から5,500枚の土師器皿と、巴文軒丸瓦片が出土している。

第3節 周知の遺跡

周 知 の 遺 跡 一 覧 表

遺 跡 名	種 類	時 代	地 目	立 地	面 積	主 な 成 果 等
1 来迎寺遺跡	集落跡	鎌倉	宅地	丘陵腹	3,100m ²	15~16世紀の陶磁器・土師器・瓦等検出
2 池ノ谷遺跡	散布地	旧石器	水田	平 地	62,300m ²	旧石器が表面採取されたと伝えられる
3 大宮遺跡	散布地	江 戸	宅地	平 地	5,000m ²	中世の遺物包含層
4 東円寺跡	寺院跡	平安~室町	宅地	平 地	48,000m ²	瓦・土器多数出土、寺院の形態は不明
5 城ノ下遺跡	城郭跡	室 町	宅地	丘 陵	61,800m ²	城郭関連の小字名と中世の遺物包含層が分布
6 成合寺遺跡	墓 地	室 町	畠地	丘陵腹	69,000m ²	14世紀代の600基以上の土塹墓群等検出
7 高藏寺城跡	城郭跡	室 町	山林	山 頂	34,800m ²	土壘・堀切等の遺構を確認する
8 土丸・雨山城跡	城郭跡	室 町	山林	山 頂	328,500m ²	月見ノ亭・馬場・千疊敷の地名が残る
9 五門遺跡	散布地	古墳~江戸	宅地	丘 陵	2,300m ²	土師器片等が検出される
10 五門北古墳	古 墳	古 墳	宅地	丘 陵	1,900m ²	現在消滅
11 五門古墳	古 墳	古 墳	宅地	丘 陵	1,500m ²	現在消滅
12 大浦中世墓地遺跡	墓 地	室 町	墓地	平 地	18,400m ²	享徳四年(1445)銘の五輪塔地輪等出土
13 久保城跡	城郭跡	鎌倉	水田	平 地	86,300m ²	飛鳥期の構から須恵器・土師器・他瓦器多い
14 山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	倉	宅地	6,800m ²	坂郭は未確認。遺物散布地
15 大谷池遺跡	散布地	古墳~江戸	池	平 地	51,400m ²	池の汀線で須恵器片表面採取
16 祭礼御旅所跡	祭礼跡	室 町	山林	丘 陵	6,300m ²	五門・緋屋共同墓地
17 正法寺跡	寺院跡	鎌倉	倉	宅地	55,000m ²	寺院跡未確認。伝承地
18 小垣内遺跡	寺院跡	江 戸	道路	丘 陵	7,000m ²	毘沙門堂跡、現在消滅
19 金剛法寺跡	寺院跡	室 町	宅地	平 地	5,100m ²	大森神社・神宮寺
20 鳥羽殿城跡	城郭跡	室 町	山林	丘 陵	72,600m ²	小字名と地形からの城郭跡推定地。遺物包含層
21 墓ノ谷遺跡	寺院跡	室 町	山林	丘陵腹	32,000m ²	寺院伝承地、中世遺物包含層
22 花成寺跡	寺院跡	室 町	山林	丘 陵	28,000m ²	寺院伝承地
23 降井家屋敷跡	屋敷跡	室町~江戸	宅地	平 地	12,000m ²	星敷地を区画する構や近世の陶磁器等出土
24 大久保A遺跡	散布地	江 戸	宅地	平 地	8,100m ²	近世の陶磁器を出土する
25 下高田遺跡	条里跡	鎌倉	田	平 地	57,000m ²	中世の遺物包含層
26 大久保B遺跡	集落跡	弥生~江戸	宅地	平 地	47,800m ²	弥生末~古墳初期の遺物
27 紺屋遺跡	散布地	古墳~江戸	宅地	平 地	22,400m ²	奈良~平安期の河川跡検出
28 白地谷遺跡	散布地	室町~江戸	田 谷	平 地	129,600m ²	中世の遺物散布地
29 大久保C遺跡	散布地	室町~江戸	宅地	平 地	4,500m ²	中世の遺物包含層
30 千石堀城跡	城郭跡	室 町	山林	丘 陵	1,000m ²	天文年間(1573~92)の難賀衆徒の城跡
31 口無池遺跡	散布地	平安~江戸	宅地	平 地	11,200m ²	平安末~鎌倉初期の遺構、遺物
32 大久保D遺跡	散布地	鎌倉~江戸	宅地	平 地	9,200m ²	中世の遺物包含層
33 大浦遺跡	散布地	鎌倉~江戸	田	平 地	4,900m ²	13~14世紀の瓦器等検出
34 久保A遺跡	散布地	鎌倉~江戸	宅地	平 地	4,400m ²	建物跡、8~11世紀の土器
35 久保E遺跡	集落跡	弥生~江戸	宅地	平 地	2,900m ²	弥生末~古墳初期の遺物多数
36 久保B遺跡	集落跡	鎌倉~江戸	宅地	平 地	5,000m ²	13~14世紀の瓦器等検出
37 中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町~江戸	宅地	平 地	21,300m ²	近世の陶磁器多数
38 朝代北遺跡	散布地	鎌倉~室町	宅地	平 地	60,000m ²	13~14世紀の瓦器等検出
39 七山東遺跡	散布地	奈良~室町	田	平 地	80,000m ²	古代須恵器・土師器・瓦器等検出
40 小垣内西遺跡	集落跡	奈良~室町	宅地	平 地	3,600m ²	古代須恵器・瓦器・瓦等検出
41 久保F遺跡	集落跡	弥生~室町	宅地	平 地	1,436m ²	石器・平安頃の建物等検出
42 野田遺跡	集落跡	繩文~江戸	宅地	平 地	290,000m ²	繩文石器・古代~近世の集落
43 小垣内中遺跡	集落跡	奈良~室町	宅地	平 地	3,500m ²	中世の集落

熊取町遺跡分布図



第3章 調査成果の概要

第1節 朝代北遺跡13-1区の調査



朝代北遺跡について

朝代北遺跡は平成10年に発見された主に中世の包含層が分布する散布地遺跡であり、今のところ遺構は確認されていない。付近は丘陵と谷が対をなす地形を呈しており、近年原子力を活用する大学の研究施設や工業施設が開かれるまでは、谷状の場所を埋め立てて畠地に利用されるなどしていた。

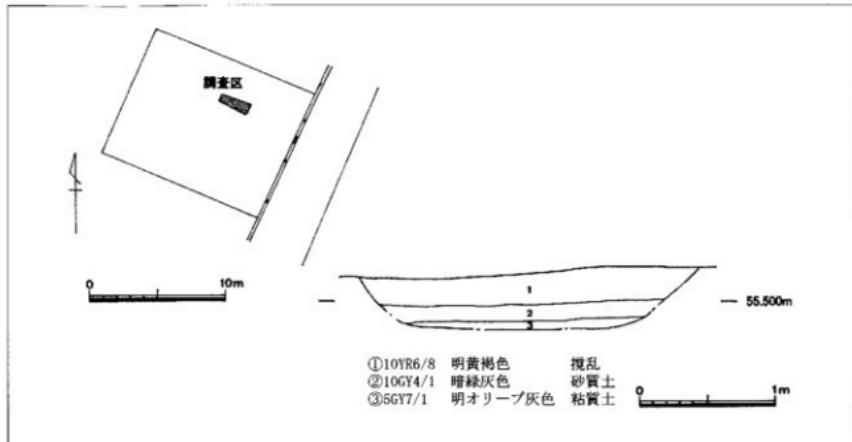
調査地 熊取町朝代東2丁目5-23

調査期間 平成26年3月10日

位置と環境

朝代北遺跡の南端部に位置し、主要地方道泉佐野打田線(府道62号)から東に入った分譲住宅地の一角であり、府道路面からは東側の雨山川に向かって徐々に低くなっている地形の途中に相当する。京都大学の原子炉実験所の敷地からは直線距離で150m程の距離を計る。

周辺ではこれまで数度調査が行われ(99-2区～99-6区など)、ほとんどで中世包含層を検出している。



調査の内容と結果

1カ所の調査区を設定して機械掘削による調査を実施した。現地表面より下へ0.25mの深さまでは、近年の造成に関わる客土があり、以下地表面から下へ0.45mの深さまでが近年まで行われていた耕作土と床土、それ以下に中世の所産と考えられる耕作土が厚く存在しており、土師器の細片を検出した。中世の耕作土は割と深いものと思われるが、工事による破壊は及ばない。遺構は検出しなかった。

第2節 東円寺跡14-1区の調査

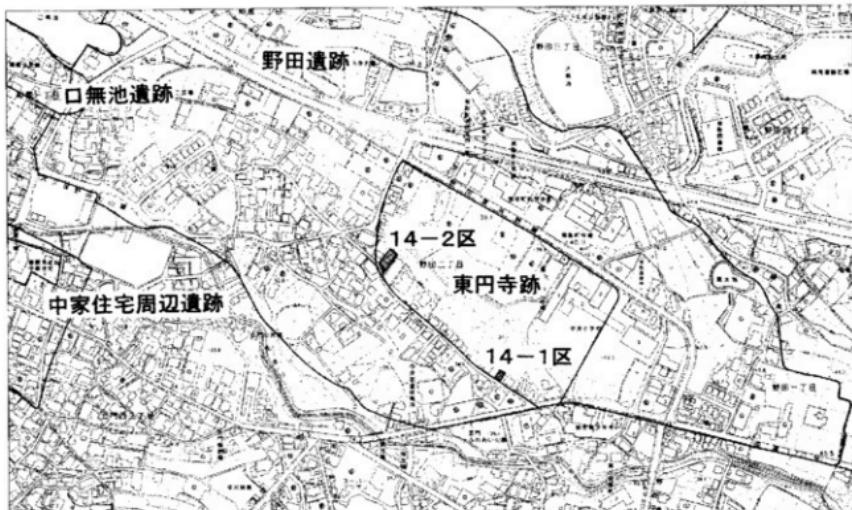
東円寺について

東円寺(東耀寺)は現在地上に何ら痕跡を残していない。16世紀に著述されたとされる『葛城峯中記』に「野田山…」の記述がされる寺院で、平安時代末頃に創建され、中世～近世を通じて存続したものの中興維新の廃仏毀釈で完全に法灯が絶えたものとされている。

また江戸時代に著述された『先代考拠略』によれば、東円寺はかつて「東耀寺(トヨウジ)」と呼称されていたとされる。中世の東耀寺は豊臣秀吉の来襲で完全に焼失したとされるが、江戸時代に入って再建され「東円寺(トウエンジ)」と呼称されるようになったという。

現在の遺跡としての東円寺跡の範囲内においては、これまで多くの発掘調査が行われて瓦器碗を中心とする中世の遺物と掘立柱建物跡が検出されているが、肝心の寺院の推定中心地では本調査・確認調査が行われていない。周辺地の調査で出土した複弁蓮華文軒丸瓦や均等唐草文軒平瓦のうち残存状態の良いものは熊取町指定文化財に指定されている。

また発掘調査の成果から、熊取町野田にあったこの寺院は創建後数十年経た鎌倉時代に火災で大方の建物群が焼失した可能性がある。出土する中世土器群の比較観察からすれば、火災が起きたのは13世紀代だったのではないかと思われるが、その火災の原因等については今のところ不明のままである。また創建期の寺院が焼失した後は、規模を縮小して復興したものと考えられるが、寺域の大部分は農地に作り変えられたらしいことがわかっている。



る。引き続き周辺に集落が営まれたようで、尾上式瓦器椀編年によるIV期の所産が多く検出されている。15世紀以降の遺物は極端に少なくなるが、これは寺院の繁栄や集落の規模などの変遷に比例しているものと思われる。

調査地 熊取町野田2丁目2209-5

調査期間 平成26年6月4日

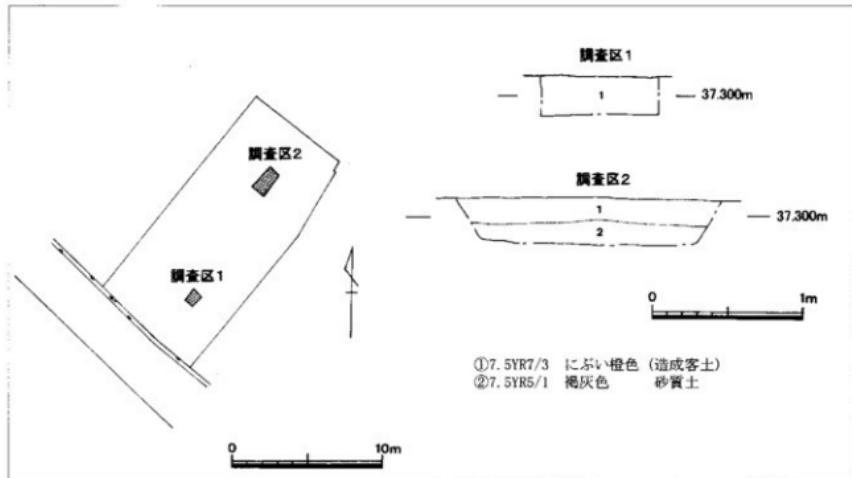
位置と環境

貝塚市水間へと抜ける泉佐野市中庄方面よりJRの高架橋を潜って通る旧国道170号のJA熊取の店舗のすぐ北裏に位置し、遺跡「東円寺跡」の推定境内地のすぐ南側部分に相当し、小字名は「大門」とされる。過去に届出地の西隣接地では10-1区、東隣接地で08-1区、南隣接地で88-3区と88-9区と、いずれも個人住宅の建設に伴って調査を実施している。このうち88-9区の調査では、溝と瓦質の羽釜破片を検出しているが、その他の調査では中世の層を検出しているものの遺構や遺物は検出できていない。

また、届出地は町道より約0.5m程高い平地になっているが、これはかつての宅地の造成時にある程度の盛土がされている。

調査の内容と結果

2つの調査区を設定して、機械掘削によって基礎工事深度の地表面から下に0.3mまで掘削した。地表面から下へ0.2mの深さまでは、近代～現代の攪乱土層が存在するが、それ以下に中世のものと思われる層が存在する。この層には遺物等ではなく、工事による埋蔵文化財の破壊はないものと判断した。



第3節 東円寺跡14-2区の調査

調査地 熊取町野田2丁目2336-1、2336-2の各一部

調査期間 平成26年8月29日

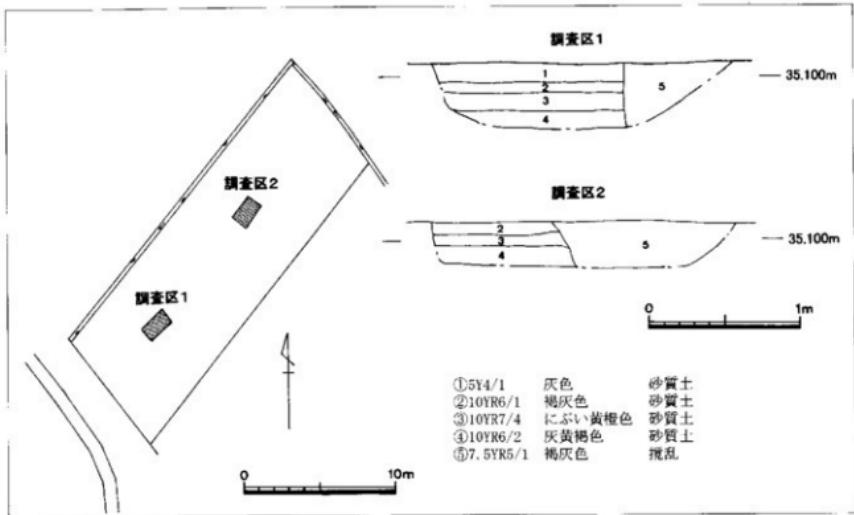
位置と環境

調査地点は遺跡の西端部に位置し、周辺は野田(下野田)の集落が展開している。かつて繁栄したと考えられる東円寺の推定境内からはずや西側に外れていると思われるが、届出地のすぐ南側の個人住宅ではかつて2度の調査が実施されており(東円寺跡88-8区、00-5区)、88-8区では中世の溝や奈良時代の須恵器、瓦器、石棒などを検出、88-8区の東隣接地の00-5区では、非常に狭小なトレチ内の地表面下約0.8m付近から、瓦器や白磁碗、東円寺の軒平瓦の断片、土師器皿、同蛸壺の破片群約900点を検出している。軒平瓦が見つかっていることから、この付近にも寺院の施設の一部等が存在した可能性を伺わせるものと報告している。

また、届出地には織維関係の工場が建てられていた関係で、地表面及び地層の損傷個所が多く見受けられた。

調査の内容と結果

2つの調査区を設定して、機械掘削によって基礎工事深度と申告する地表面から下へ0.3mの深さまで掘削して調査を実施した。地表面から下へ0.3mまでは近世～近代の耕作土層があり、それ以下に中世のものと思われる層が存在するが、調査掘削の範囲内では遺構や遺物は検出できなかった。前記の隣接地の過去の調査結果と符合するような遺構や遺物については、もう少し下位に存在するものと思われる。



第4節 久保A遺跡14-1区の調査



久保A遺跡について

本町では34番目の遺跡で、平成に元号が替わる前後の時期に発見された中世の土器を含む包含層が分布する小さな散布地であったが、平成12年には町道小谷穴釜線の拡幅工事に伴う久保A遺跡00-1区の発掘調査で、中世の掘立穴式建物や瓦器等の土器群(破片約925点)を検出して、かつては現在の小谷の集落から西側に離れた地点にも集落もしくは寺院

のような建物があったことがわかつて來た。この掘立柱建物は鎌倉時代に建立され、同時代の内に一度焼失したにも拘らずその後再建された痕跡が残されている。2間四方の比較的小規模な寺堂であった可能性もあるが、周囲の遺構の状況や出土遺物には生活痕が観察できることなどから住居であった可能性もある。

調査地 熊取町小谷南1丁目1824-3

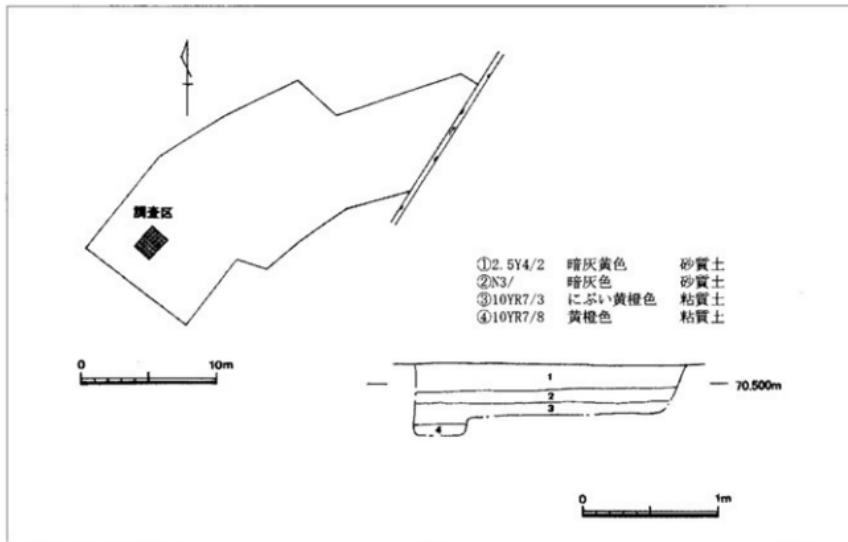
調査期間 平成26年10月15日

位置と環境

申請地は小谷の集落の西外れに位置し、南北方向に走る町道小谷穴釜線に接しており、それまで民間の資材置き場であったが、今回個人住宅新築の申請があった。現在周囲は比較的平坦な地形を呈しているが、申請地の北に東西方向の比較的深い流路があり、かつてはそれが小河川であって、これを中心とした谷状の地形を呈していたと考えられる。従つて届出地はその谷に向かって北方向へ傾斜する丘陵の北端部分であったことが考えられる。

調査の内容と結果

申請地の一番南西奥の住居予定部分に調査区を設定して、住居の基礎掘削の深さとなる地表面から下へ0.3mまで調査掘削し、他に一部で地表面から0.4mの深さまで観察できた。現地表面から下に0.2mほどの深さまでは近年の擾乱土層であり、以下に約0.1mほどの旧耕作土が存在する。それ以下に中世の土層が存在しているのが見えるが、土器等は検出できなかった。また隣接する00-1区の調査成果より、遺構などが検出できる黄褐色粘質土の地山は地表面より下へ1.0m程度の深さ付近にあるものと考えられ、当調査地点も同様と見られる。



第5節 野田遺跡14-3区の調査



野田遺跡について

野田遺跡は熊取町役場周辺一帯の約290,000m²にも及ぶ集落遺跡である。熊取町役場前の45,000m²程の地域については、平安末期以降の寺院の瓦群やその他の埋蔵文化財が非常に多く出土し、寺院を示すものと考えられる小字名が残されている区域であることから、当初から寺院跡の遺跡「東円寺跡」としていたが、この区域よりも外側における発掘調査出土例の増加とともに、「東円寺跡」の範囲は飛躍的に拡大して、野田地域をほぼ囲む程の町内最大の範囲を有する遺跡になってしまっていた。さらに、奈良期以前の埋蔵文化財が確認される例も増え、平安末期に創建されたとされる寺院遺跡の性格を超える様相であることからも、平成15年11月に本来の「東円寺跡」部分と、それより広範な集落遺跡「野田遺跡」に分割したのである。

野田遺跡では、町立中央小学校の調査で縄文時代早期と推定される尖頭器が出土した他、現在の野田の住宅街の調査で、奈良期の掘立柱建物群や須恵器などが検出され、野田遺跡の集落が営まれた時期は少なくとも奈良時代まで遡ることが推測されている。また調査の成果から、集落は中世初期頃にもっともよく繁栄していたことも推測される。発掘調査の成果からは、集落が室町時代の中期頃より減じて農地化したこととも推測されている。

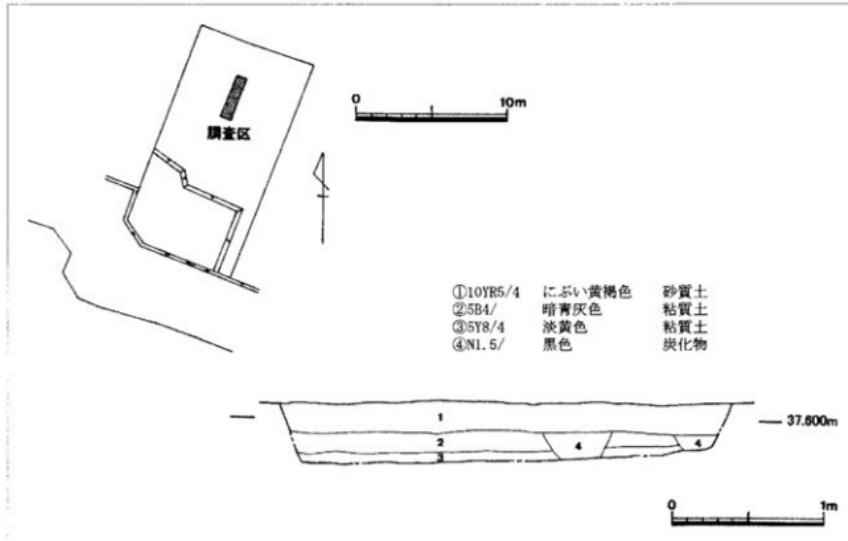
調査地 紺屋2丁目1143番5、1139番7

調査期間 平成26年10月30日

位置と環境

調査地点は、野田遺跡の北西部に位置し、大阪外環状線の北側にあり、外環状線側に向かって下り傾斜する広い丘陵の緩斜面途中に立地する。この丘陵腹は、戦後の航空写真を

見ると雑木林と畠地しか認めることができないが、昭和40年代後半頃より比較的小規模な住宅地の開発が何度も行われ、現在は住宅が多く建つ景観に変わっている。届出地の北背面には樹林の名残もあることから、かねてより雑木林が広がっていたと思われる。野田遺跡は広大な面積を有するが、大阪外環状線より北側の地ではこれまで中世以前の遺構・遺物を検出することは稀であり、届出地の周辺において近年数回の発掘確認調査を行っているが成果は上がっていない。



調査の内容と結果

調査区を設定して、機械掘削による調査を実施した。地表面から下に0.4m程度の深さまで掘削したところ近年の造成の際の客土が見られるのみで、先ごろまであった個人住宅は盛土の上に建てられていたことがわかった。地山部を検出することなく、まだ下位にあると考えられる。この場所は元来もっと低い位置に生活面があり、宅地造成時において大幅な盛土がなされているものと考えられる。

第4章　まとめ

朝代北遺跡

これまでの周辺地での調査と同様に中世の土層が存在することがわかった。遺構が検出できていないのは相変わらずであるが、遺跡内の調査ではまんべんなく土器破片が見られるので、遺跡のどこかに集落等の遺構群が存在する可能性が高く、当分は遺構の確認を目指したい。

東円寺跡

14-1区は小字名「大門」相当場所であり、新たな遺構の発見が期待されたが、過去の造成の盛土もあり、遺構面の検出までは至らなかった。周辺隣接地点での調査でもさほど目立った成果が上がっていないことから、かつて東円寺跡が存在していた頃は住居等が営まれていなかつた部分とも考えられる。

14-2区は14-1区から町道を西北へ190mほど入った地点であり、周辺隣接地点での調査で非常に多くの中世遺物(東円寺の軒平瓦など)や溝等の遺構も検出されていることから、東円寺関連の建物・住居があった可能性が大きいにある地点であるが、今回は調査掘削の規模が小さかったことなどから、新たな知見は増やせなかつた。

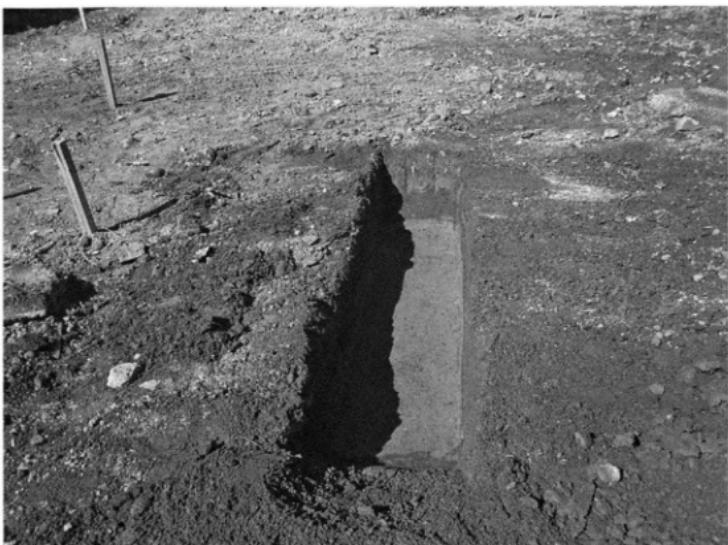
久保A遺跡

平成12年の町道拡幅および新設工事に伴う調査(久保A遺跡00-1区)で見つかった掘立柱建物跡等の遺構は非常に大きな成果で、それに続く遺構の発見も期待されたが、新たな知見はなかつた。届出地付近は住宅街から少し離れて田畠が残される場所にも拘らず、付近の数か所の調査地点ではいずれも中世の包含層等を検出しており、中世には開発等が盛んに行われた場所であったことが覗われる。小谷区の集落に近いが、現在ではほとんど民家がないので、今までに知られていない集落跡などが発見されると面白い場所である。

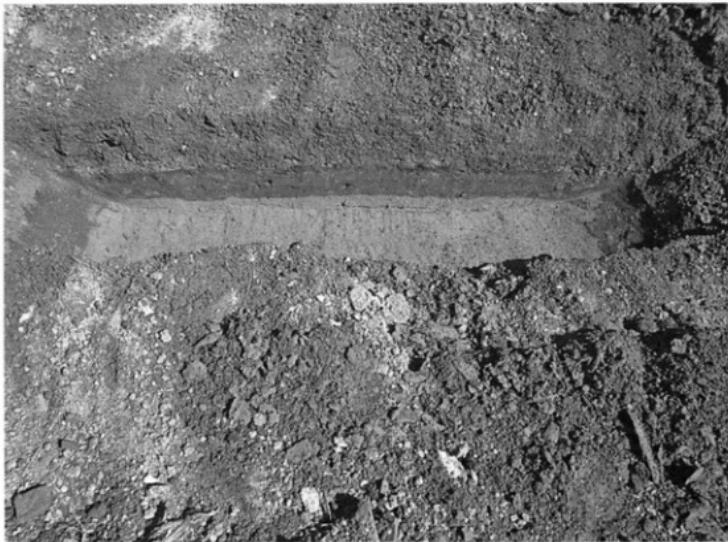
野田遺跡

今回の調査地点は、大阪外環状線の北側の丘陵腹の区域にあり、従来の調査結果と同様、埋蔵文化財の検出はなかつた。ただし、調査は個人住宅の建設に伴うものであるため、深度の浅い掘削にとどめており、その範囲内では大幅な盛土のみが確認され、存在する可能性のある生活面や包含層、あるいは地山は検出できなかつた。従ってこの付近の丘陵腹は、かつては今よりもかなり低い形狀を呈していたものと考えられる。今後も個別の工事に対しては、埋蔵文化財が検出されることがないか注意深く調査していきたい。

朝代北遺跡 13-1 区

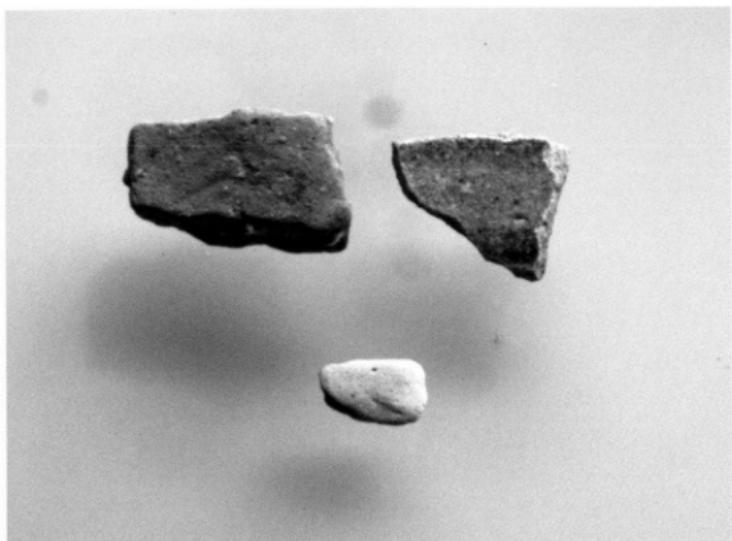


調査区を東から見る



調査区北壁

朝代北遺跡 13-1 区



検出した土器

東円寺跡 14-1 区



調査区 2 を南から見る



調査区 2 西壁

東円寺跡 14-2 区



調査区 1 を西から見る



調査区 1 北壁

久保 A 遺跡 14-1 区



調査区を東から見る



調査区北壁

野田遺跡 14-3 区



調査区を北から見る



調査区東壁

報告書抄録

ふりがな	くまとりちょういせきぐんはつくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書						
卷次	X XVII						
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第56集						
編著者名	前川 淳						
編集機関	熊取町教育委員会						
所在地	〒590-0414 大阪府泉南郡熊取町五門東2丁目3番5号						
発行年月日	西暦 2015年3月						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	○○○	○○○	○○○	○○○
かほりあきらいせき 朝代北遺跡 13-1区	大阪府泉南郡 熊取町朝代東	27361	38	34° 23' 03"	135° 21' 16"	20140310	3.0
とうさんであと 東円寺跡 14-1区	大阪府泉南郡 熊取町野田	27361	4	34° 23' 46"	135° 21' 26"	20140604	4.0
とうさんであと 東円寺跡 14-2区	大阪府泉南郡 熊取町野田	27361	4	34° 23' 51"	135° 21' 22"	20140829	4.0
くびへーセキ 久保A遺跡 14-1区	大阪府泉南郡 熊取町小谷南	27361	34	34° 23' 29"	135° 22' 33"	20141015	3.0
のだいさき 野田遺跡 14-3区	大阪府泉南郡 熊取町野屋	27361	42	34° 24' 01"	135° 21' 21"	20141030	3.0
所収遺跡	種別	遺跡の主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
朝代北遺跡13-3区	散布地	鎌倉～室町	なし	土師器等	なし		
東円寺跡14-1区	寺院跡	平安～江戸	なし	なし	なし		
東円寺跡14-2区	寺院跡	平安～江戸	なし	なし	なし		
久保A遺跡14-1区	散布地	鎌倉～江戸	なし	なし	なし		
野田遺跡14-3区	集落跡	绳文～江戸	なし	なし	なし		

熊取町埋蔵文化財調査報告 第56集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・XXVII

発行日 平成27年3月

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野山一丁目23番38号

印刷 (有)山村印刷所

大阪府貝塚市近木1483-8